

流域を、柔らかく住みこなす

Responsive infrastructure & adaptive inhabitation

未来の琵琶湖・淀川流域圏デザインチーム Future Lake Biwa-Yodo River Basin Design Team

これまでの国づくりは、工学的な建設技術による費用便益の最大化を目指し、効率的な土地利用を普及してきました。その結果、我が国の幸福度は飛躍的にたかまったように見えた一方で、人口減少や、気候変動にともなう災害の増加といった、より大きな将来の変化に対して、柔軟に対応することができない可能性が高まっています。また、情報技術の進歩によって、人々や地域の間でのコミュニケーション速度は飛躍的に増加しましたが、この結果、我が国が本来もっていた多様な自然景観のリアルな体験や、直接的な人とのふれあいの機会は日常のなかで減少し続けています。私たちは本当に幸せになったのか、本当に安全になったのか、考え直す時期に来ているのです。私たちが提案するのは「流域を、柔らかく住みこなす」という新しい考え方による、22世紀の国づくりの方法です。そうすることで、これまでの画一的な治水と交通の在り方の変革を中心として、地域や人々の多様性を活かしながら、互いにリスクとメリットを分け合い、立場を理解し合えるような、本当に生き生きとした社会が実現され则认为しています。



巨椋池環境循環ビレッジ
巨椋池を再生することで、池周辺では自然を身近に感じることのできる豊かな暮らしが再び営まれるようになります。AIやIoT、ロボット技術を取り入れることによって、多くの人々が漁業や農業といった一次産業を体験できるようになります。それによって巨椋池を中心とした文化的な景観が蘇ります。



八幡水郷文化シティ
ここでは、川を柔らかく取り入れたデザインによって、かつての鳥羽離宮や平等院でみられたような水位の変化を楽しむ文化的で豊かな暮らしが再現されます。平常時には水辺に船を浮かべ、自然や歴史的な風景を堪能することができます。降雨時には、高度な水管理技術によって安全が確保される中で、普段とは異なる景観を楽しむことができます。



エコロジカルcommons
エコロジカルcommonsでは、この地のローカルな自然資源を当てるに、多くの人々が集まり、場所や時間をシェアしながら、交流するようになります。ここでは、土地の固有性を生かした、ほぼ完全な地産地消が実現し、観光地やリクリエーションの場として、国内外問わず、人が集まる地域となるでしょう。



